

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：33919

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02905

研究課題名（和文）積極的な聞き手から話し手になるための英語会話参加能力 その教育効果の実証研究

研究課題名（英文）From active listener to effective speaker in English conversation: an examination of teaching conversation skills to Japanese learners

研究代表者

村田 泰美（Murata, Yasumi）

名城大学・外国語学部・教授

研究者番号：70206340

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：CEFRにおいて定義されている「やり取り」のうち「会話」は人間関係の構築、維持を目的とした言語活動である。本研究は「会話」の仕方において日英語会話の比較から、日本人が積極的に英語会話に参加するためのストラテジーを抽出し教材にした。その教材を日本人学生の指導に使った後の英語会話をデータとして分析し、その有効性を確かめた。また「会話」の方策は英語の「やり取り」の基本となるため「英語討論」にも応用できるものであることを実証的に確認することを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本における英語教育は、教養的な位置づけからより技能に比重を置く潮流の中にある。産業界や経済界を牽引するグローバル人材育成が不可欠であり、グローバル人材の重要な要因として「英語力」特に「話す」力が重要だと認識されるに至っている。しかし「話す」力に関しては「話す」ことと、「会話」がどのように違うのか、英語がうまく発音でき、単語の知識があり、構文が理解できていれば「話す」力や「会話力」に直結するののかという議論は今までほとんどなされていない。本研究は日本人がと英語で積極的に会話に参加するためのストラテジーを明らかにし、その実効性を確認したことが成果である。

研究成果の概要（英文）：The research has attempted to measure the validity of teaching English conversation strategies to Japanese native speakers. Such strategies were first extracted by a comparative study of English conversation data by speakers of English as a first language and Japanese conversation data by speakers of Japanese as a first language. Japanese use different strategies from English to build rapport when they converse, and thus need to know the specific strategies to actively participate in English interactions. By using transcripts of English conversation data before and after the teaching of strategies, this research shows the explicit teaching of the strategies have led to more active and successful participation in conversation by the Japanese learners of English.

研究分野：言語学

キーワード：英語会話のやり取り 英語初対面会話 英語会話運用能力 日英語会話構造 日本語母語話者を対象とした英語教育 英語討論

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1. 研究開始当初の背景

CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) は、そこに記述される Can-Do リストという形で語学教育の国際標準規格として日本の英語教育に大きな影響を及ぼしてきた。2018 年度に発表された CEFR 補遺版 (*CEFR Companion Volume with New Descriptors*) では、言語技能はコミュニケーションを目的として存在するという言語観をさらに明確にし、コミュニケーションという視点から 4 技能は産出 (production) のための技能と受信 (reception) のための技能とに二分された。「やり取り」は産出と受信の両方ともが駆使されて成立する言語活動であり、「会話」は「やり取り」に属し、改まらない「やり取り」と捉えられている。2018 年度の補遺版では「会話」のディスクリプタの充実が図られた。

研究代表者と研究分担者は、今までに日本語と英語の初対面会話を 82 本収集し、英語会話と日本語会話の構造の比較、話し手と聞き手の役割や会話の進め方を研究し、日本語会話と英語会話では会話の進め方に大きな差が見られることを解明した。特に「話題の展開方法」「質問の仕方」「質問への答え方」「自己開示」「応答(相づち)と聞き返し」「会話の順番取りと発話量」が大きく異なる。これらは日本語を母語とする学習者に対して指導可能な言語事象であり、日本人が活発な英語のやり取りに参加するために有効的なスキルとして働くことを示していく必要があった。

## 2. 研究の目的

本研究ではわれわれの今までの「やり取り」に関する研究に基づいて、以下からの三点を探求し、「英語会話運用のストラテジーは指導可能であり、会話参加能力の飛躍的向上につながる」という仮説を検証した。

日本語母語話者が英語会話に参加するために必要なスキルを教材として開発する教材を使って実際に指導することが英語会話運用能力につながることを検証する  
英語会話運用能力は日常的な社交会話(雑談)だけでなく、ビジネス交渉会話などの英語討論に積極的に参加するための架橋ともなる

## 3. 研究の方法

研究はスキル教材の作成、指導前および指導後の英語会話データの収集、英語会話データ分析による指導の効果の計量という流れに沿って遂行された。

## 4. 研究成果

### (1) 教材の作成および指導の実施

平成 29 年度には、留学経験のない 7 名の日本人大学生(1 年生)を対象に英語会話能力の指導のための実験授業を行った。指導は 1 日集中講義形式とし、およそ 6 時間半程度を費やした。また実験授業以前には、指導を受けた学生と受けていない学生の英語会話を比較する参照

データを得るため、日本人学生（2名）と留学生（2名、インドネシアおよびマレーシア出身）との英語会話と会話後のフォローアップ・インタビューを収録した。指導のための実験授業で使用した英語会話指導用教材は学生用資料、指導者用資料、学生用のワークシートで構成されている。

平成30年度は社交会話からさらに高度な英語運用能力が求められる英語討論の実験授業を行った。英語を専攻する大学2年生7人を対象とし、指導と練習に約8時間を費やした。英語討論と言えども友好関係を維持しながらの討論が求められるため、英語表現を「配慮（ポライトネス）」の点から分析し、その意味を確認させた。どのストラテジーも学習者の「内省」を経ることがより確実な習得につながるというインタラクション研究の知見に基づく。

### （2） アジア地域での英語会話および英語討論の実践

平成29年度に英語会話の実験授業を受けた学生の中から、英語力の条件を満たし、長期海外渡航経験のない学生を4名選抜して、台湾（国立彰化教育大学）と韓国（ソウル公益大学）にでかけた。目的は実験授業で学んだ英語会話のストラテジーが使えるようになっているか、またストラテジーを使うことで、より積極的に会話に参加できるかを見ることである。英語会話はビデオカメラとICレコーダーに収録した。

平成30年度には英語討論の指導を受けた学生7名のうち、英語能力や面接を通して4名を選抜して香港にでかけた。英語を第二言語として使用する香港教育大学の学生たちと前もって与えられていたテーマについて、30分間英語で討論し、グループで意見をまとめるように指示した。現地の学生2名と日本人学生2名の4名での英語討論で、二つの異なったテーマについて討論させた。討論はビデオカメラとICレコーダーに収録した。

### （3） 英語会話指導の有効性

日本語会話の特徴と英語会話の特徴を比較し、日本語話者が英語会話でより積極的に話すために抽出したストラテジー（方策）指導の効果を測った。指導の効果を見るために、指導前と後の英語会話データを比較するが、効果をより正確に判断するため、同一話者（以下データ中のRyu）の指導前と指導後を比較する。

#### < 発話量の増加 >

表1は指導前会話と指導後会話の参加者別の発言回数（ターン）を示す。

表1 指導前（日本）と指導後（台湾）における参加者のターン数

	各参加者のターン数			会話全体ターン数
	Ryu	Eling	Kuan	
指導前@日本	187	219	120	526
	Ryu	Michael	Atong	
指導後@台湾	242	192	82	516

表 2 は会話参加者が発した単語数、図 2 は会話全体に占める単語数の比率を円グラフで示す。

表 2 指導前（日本）と指導後（台湾）における参加者の単語数

	各会話参加者と単語数			会話全体単語数
	Ryu	Eling	Kuan	
指導前@日本	580	2,418	636	3,634
指導後@台湾	965	1,305	580	2,850

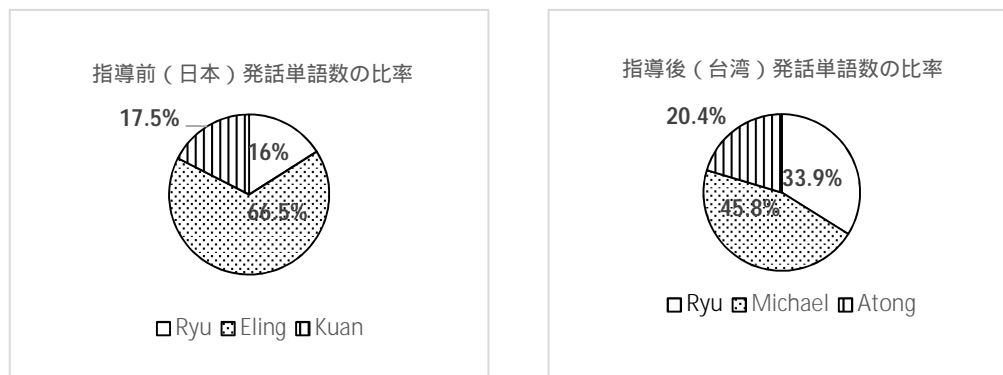


図 2 指導前（日本）と指導後（台湾）における参加者の発話単語数の比率

Ryu の発話量は指導前と指導後で比べると、占有率が 16%から 33.9%となり 2 倍以上に増えた。実数で見ても 580 語から 965 語となり約 1.7 倍に増えたことが分かった。指導後ターン数だけでなく、ターン 1 回の話しが長くなっていることが明らかとなった。

< 質問・語彙的な相づち・追加情報の出現 >

Ryu は発話量が増えただけでなく、発話の質も変化がみられた。具体的には語彙的な相づちが多くなり、相手への質問が増え、質問に答える際に一言付け加えたり、自分に関して情報を出す「情報の提供」が増えたのである。より積極的に情報を出すターンは指導前の 7 回から指導後は 26 回に増えた。4 倍弱の増加である。指導前の会話では Ryu は質問には Yes または No だけで発話を終え、そこで会話が終わってしまうことがほとんどであったので、このような追加情報の提示が増えたことは指導の明らかな成果と考えることができる。

#### (4) 英語討論指導の有効性

英語討論に関しては指導前のデータがなく、計量的に数値で比較をすることはできないため、討論後に行った聞き取りを通して日本人学生から得た回答を通してその有効性を探る。

< 言いたいことが言えたか >

日常的テーマに関しては、日本人学生 4 名全員が言いたいことは言えたと答えた。また討論自体もグループで合意に至ったので成功したと判断していた。

< 指導項目に関して >

討論でも相手に配慮や共感をしながら、討論することは日英共通なので理解していた。しかし日常会話であまり使われない討論の表現は日本語でも難しいので、英語の討論表現を使えるようになるためには、練習にもっと時間をかける必要があるという意見が多かった。

< 英語力 >

テーマにより知識と語彙力不足で相手の話を聞くことで精一杯になってしまったという回答が多かった。文法が間違っていないか気にし過ぎてしまうという内省をした学生がいた。全員の学生が香港の学生との圧倒的な英語力の差について言及していた。

学生の回答を見る限り、日常的な雑談範囲の語彙で討論ができるテーマでは討論に積極的に参加でき、またグループでの合意に到達したことで、学生自身が討論は成功したと考えていることが分かった。少なくとも聞き手に終始するということはなかった。討論の表現を学び、英語会話参加の基本ストラテジーを駆使できれば、意見を述べ、討論に参加することができると考えられる。今後は文字起こしデータから討論への参加程度について数値的な客観的裏付けをとる必要がある。

#### ( 5 ) 英語会話指導および英語討論指導の意義

本研究では人間関係構築・維持のために「話す」こと、とりわけ「会話」するための具体的な方策（ストラテジー）を抽出し、指導教材を作成した。その上で教材を使っでの「会話」指導は可能でかつ有効であるという仮説を検証した。社交会話では指導前と比較して発話量、相づち使用を通しての共感醸成、情報提供の増加が認められた。指導は可能であるだけでなく、有効であることを示すことができたので、仮説は成立したと結論づける。社交会話の方策をベースにした英語討論スキルの指導に関しては、計量分析の結果を待たなければならないが、日本人学生の聞き取り調査から、一定の有効性が予測される見通しが得ることができた。

< 引用文献 >

Council of Europe. (2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.

Council of Europe. (2018). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment. Companion volume with new descriptors*. Retrieved from [www.coe.int/lang-cefr](http://www.coe.int/lang-cefr).

Kecskes, I. (2019). *English as a lingua franca*. Cambridge: Cambridge University Press.

津田早苗、村田泰美、大谷麻美、岩田祐子、重光由加、大塚容子 (2015) 『談話構造からみた日・英語コミュニケーション：英語教育への応用』 ひつじ書房

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Murata, Yasumi. et al.	4. 巻 第13号
2. 論文標題 The English program of the Faculty of Foreign Studies: Committed to results	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 名城大学教育年報	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Murata, Yasumi.	4. 巻 vol. 2
2. 論文標題 The need for explicit teaching of interactional skills: Cultural assumptions underlying English language interactions.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Meijo University Journal of the Faculty of Foreign Studies	6. 最初と最後の頁 33-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田泰美	4. 巻 15号
2. 論文標題 名城大学におけるアクティブラーニングとCLILの取り組み	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 JACET中部支部紀要	6. 最初と最後の頁 22-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮本友樹、片上大輔、重光由加	4. 巻 41
2. 論文標題 人間と新しい関係性を構築する擬人化エージェントの開発のために—ボライトネス理論の側面から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学会	6. 最初と最後の頁 214-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小沢一仁 重光由加	4. 巻 第41巻 2号
2. 論文標題 授業現場における質問と発問の違い - 語用論と心理学の視点から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京工芸大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮本友樹、片上大輔、重光由加、宇佐美まゆみ、田中貴紘、金森等	4. 巻 第30巻 5号
2. 論文標題 ポライトネス・ストラテジーに基づく会話エージェントの言語的な振る舞いの違いが人との関係性構築にもたらす効果 ~ 初対面における冗談の心理効果 ~	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本知能情報ファジー学会	6. 最初と最後の頁 653-765
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 重光由加	4. 巻 第25回
2. 論文標題 聞き手による会話の修復とラポール: 談話分析的アプローチによるELF 接触場面のケース・スタディ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語処理学会第25回年次大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 838-841
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 重光由加	4. 巻 第41巻 2号
2. 論文標題 インドの言語環境とELF 使用場面から見る英語コミュニケーション能力 インド人と日本人のビジネス・パーソンへの座談会から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京工芸大学紀要	6. 最初と最後の頁 26-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 重光由加	4. 巻 40
2. 論文標題 Question forms in male first meetings: A quantitative study of cultural norms in Japanese and English conversations	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京工芸大学紀要	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 重光由加	4. 巻 40
2. 論文標題 Wh-(equivalent) questions for eliciting new information: A discourse analytical approach to Japanese male first meetings	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京工芸大学紀要	6. 最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷麻美	4. 巻 1
2. 論文標題 日本人の英語会話に見る話題の展開方法：話題の積み重ねとラポール形成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本女子大学文学部 文学研究科学術交流シンポジウム 第2回相互行為と語学教育 予稿集	6. 最初と最後の頁 9-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷麻美	4. 巻 第67号
2. 論文標題 日本語初対面会話における話題導入の相互行為 プロセスと対人関係機能	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都女子大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 大谷麻美	4. 巻 第42回
2. 論文標題 題の終結と開始のための相互行為 - マルチモダリティーの観点からの分析 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学会第42回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 137-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷 麻美	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 日英語の初対面会話における話題の連鎖と展開：共-選択の観点からの分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 96-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大塚容子、宇佐美まゆみ、伊藤敏	4. 巻 第25回
2. 論文標題 動画からうなずきの半自動検出と談話研究への応用	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語処理学会第25回年次大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 868-871
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤敏、大塚容子、鷲野嘉英	4. 巻 第43回
2. 論文標題 動画から顔の動きを抽出する試み 対話解析・修学行動評価への適用を目指してー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育システム情報学会第43回全国大会講演論文集	6. 最初と最後の頁 401-402
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iwata, Yuko	4. 巻 2018年
2. 論文標題 The Role of English Language Teaching for Liberal Arts Education in Non-English-Speaking Countries	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Doing Liberal Arts Education: The Global Case Studies	6. 最初と最後の頁 75-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kaoru Kiyosawa, Yoko Kobayashi, Yusa Koizumi, Satomi Yoshimuta & Yuko Iwata	4. 巻 33号
2. 論文標題 Developing Critical Thinking Skills and Attitude: An Analysis of a Reading Course in a University English Program	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Language Research Bulletin	6. 最初と最後の頁 10-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺敦子・岩田祐子・宮原万寿子	4. 巻 2018年
2. 論文標題 大学と大学院の連携による教員養成モデル：教師教育者、教員、学生三者の発達を目指して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JACET 言語教師認知研究会 研究収録 2018	6. 最初と最後の頁 54-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件（うち招待講演 1件／うち国際学会 7件）

1. 発表者名 村田泰美
2. 発表標題 Z世代を見据えた英語教育：「異文化理解」を通して生まれる「国際英語」への気づきと「異文化リテラシ」
3. 学会等名 第59回大学英語教育学会国際大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuka Shigemitsu
2. 発表標題 An analysis of social talk in ELF interaction between Japanese and Indian people
3. 学会等名 16th International Pragmatics Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 重光由加・宇佐美まゆみ
2. 発表標題 インドの観光コミュニケーション会話の収集とその活用法
3. 学会等名 第1回 語用論コーパス科研成果発表会 「『語用論的分析のための1000人自然会話コーパス』構築の趣旨と活用法」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuka Shigemitsu
2. 発表標題 Clarification requests in ELF interaction between Japanese and Indian people
3. 学会等名 JACET (大学英語教育学会) ELF 研究会講演会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 重光由加・大塚容子・宇佐美まゆみ
2. 発表標題 日本語学習者の間接発話の習得：質問紙調査報告(2)
3. 学会等名 日本語の間接発話理解：第一言語、第二言語、人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mami Otani
2. 発表標題 Interaction intopic-closing sequences: A cross-cultural analysis of Japanese and Australian English conversations
3. 学会等名 16th International Pragmatics Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷麻美・岩田祐子・大塚容子
2. 発表標題 英語インタラクション能力のための指導の試み：英語会話に積極的に参加できる学生を育てるために
3. 学会等名 第59回大学英語教育学会国際大会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大塚容子
2. 発表標題 小学生と成人の会話の収集と今後の研究可能性
3. 学会等名 第1回 語用論コーパス科研成果発表会 「『語用論的分析のための1000人自然会話コーパス』構築の趣旨と活用法」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮本 友樹, 片上 大輔, 田中 貴紘, 金森 等, 吉原 佑器, 藤掛 和広, 重光 由加, 宇佐美 まゆみ
2. 発表標題 あなたはどっち派? ユーザ属性に応じて受容性の高いポライトネス方略を選択する運転支援エージェント
3. 学会等名 HAIシンポジウム2018 専修大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩田祐子、大谷麻美、村田泰美
2. 発表標題 英語インタラクションの指導の試み 成果と課題
3. 学会等名 JACET中部支部春季定例研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 重光由加
2. 発表標題 聞き手による会話の修復とラポール 談話分析的アプローチによるELF 接触場面のケース・スタディ
3. 学会等名 言語処理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩田祐子、村田泰美、大塚容子、重光由加、大谷麻美
2. 発表標題 待遇表現研究会研究「これまでの研究成果」
3. 学会等名 JAAL in JACET
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 重光由加
2. 発表標題 話し相手としてのAI 日本語を話すAIとのコミュニケーションに何を求めるか
3. 学会等名 第3回会話・談話研究シンポジウム 国立国語研究所
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小沢一仁、重光由加
2. 発表標題 授業現場における質問と発問の違い - 語用論と心理学の視点から -
3. 学会等名 教師教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大谷麻美
2. 発表標題 話題の終結と開始のための相互行為 - マルチモダリティーの観点からの分析 -
3. 学会等名 第42回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡辺敦子・岩田祐子
2. 発表標題 振り返りのサイクルにおける「叙述」の重要性
3. 学会等名 言語文化教育研究学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩田祐子
2. 発表標題 視座としてのジェンダー：社会構造に隠された性差別を分析・可視化
3. 学会等名 Society of Intercultural Education, Training and Research
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩田祐子
2. 発表標題 日・英語初対面会話における関係構築の対照分析－聞き手の役割
3. 学会等名 日本英語学会第36回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村田泰美
2. 発表標題 名城大学におけるアクティブラーニングとCLILの取り組み
3. 学会等名 第33回（2017年度）JACET中部支部大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩田祐子
2. 発表標題 Storytelling as social and cultural practice
3. 学会等名 International Pragmatic Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 重光由加
2. 発表標題 Different cultural norms and question-answer sequences: A comparative study between Japanese and English
3. 学会等名 International Pragmatic Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩田祐子、重光由加
2. 発表標題 聞き手の役割に主眼を置いた英会話能力の育成 - 教材と指導法 -
3. 学会等名 大学英語教育学会 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩田祐子、重光由加、村田泰美
2. 発表標題 「英語会話におけるやりとり (インタラクション) をどう教えるか 会話データ分析に基づく実践的指導法と指導の試み
3. 学会等名 研究成果ワークショップ
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩田祐子、重光由加、村田泰美
2. 発表標題 「英語会話におけるやりとり (インタラクション) をどう教えるか 会話データ分析に基づく実践的指導法と指導の試み
3. 学会等名 研究成果ワークショップ
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大塚 容子  (Otsuka Yoko)  (10257545)	岐阜聖徳学園大学・外国語学部・教授   (33704)	



## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岩田 祐子 (Iwata Yuko) (50147154)	国際基督教大学・教養学部・教授  (32615)	
研究分担者	大谷 麻美 (Otani Mami) (60435930)	京都女子大学・文学部・教授  (34305)	
研究分担者	重光 由加 (Shigemitsu Yuka) (80178780)	東京工芸大学・工学部・教授  (32708)	